福島県骨髄バンク推進連絡協議会・会報

翼をありがとう

平成10年2月10日(火)発行
No.19

初の県内骨髄バンク関係者会議開催

10月7日 福島(杉妻会館)にて

企画部であった県内の骨髄バンク関係者による初会合を、十月七日午後杉妻会館において開催することが決まった。

福島県医務福祉課、福島県保健所、県市保健所の関係者の皆様の他、財・骨髄移植推進財団の調整医師、コーディネーターの方々に参加をいただいた。オブザーバーとして、東京から財団野田事務局長に駆けつけていただき、本田会長以下私達ボランティアも今後の活動に向けての、定期的に開催することが決まった。それぞれの立場から骨髄バンクのさらなる登録推進を心に誓い意見交換する機会が無かったこと、一同に会して、意見交換する機会が無かったので、より効果的な動きができるものと今回の会議の企画をさせていただいたが、とても意義ある内容となった。

ご入会を希望される方々に、それぞれに説明をさせていただきました。一同に会して、意見交換する機会が無かったこと、一同に会して、意見交換する機会が無かったので、より効果的な動きができるものと今回の会議の企画をさせていただいたが、とても意義ある内容となった。

今後、年に一回くらいのペースで、定期的に開催することが決まった。

①骨髄バンクの普及啓発と保健所の役割について

②中核市移行にともない、郡山市内でもこれまでと違ってしまったことについて

③骨髄バンクの事業に取り組まれてきた、一同に会して、意見交換する機会が無かったこと、一同に会して、意見交換する機会が無かったので、より効果的な動きができるものと今回の会議の企画をさせていただいたが、とても意義ある内容となった。

④携帯血バンクの可能性について

(いわき支部　陽田)

ドナー体験談

福島市在住　吉田孝行さん

母が心臓と肺の病気のため入院していた頃、看病入とたりとも家族の大切なご負担を考えて、白血病、再生不良性貧血、悪性貧血という病名と長期に対峙しなければならなかった死も日常の中で見てきました。それは、自分にとって過ぎ去りし日々の中で、私は、自分の命の大切さを学ばせてもらいました。

ドナーになった星野遼代さん(会津高田町)による体験談が語られ、最後に、十月二日に行った「骨髄バンク・サロンコンサート」ピアノ・ヴァイオリン・チェロ・ハープ・ソプラノ・ピアノ・ヴァイオリンのドクターの方々に、ご参加いただいたことを、一つ一つ、ご紹介しました。

『ボランティアコラボ』、これは骨髄バンクの輪をなげ捨てて、パールへの水住を決意させた。

・ビマラヤヤのけげんのドクターとして、ご参加いただい

骨髄バンクを支援するつどいの報告

昨年十一月五日、しゃくなげ会館で開催いたしました「骨髄バンクを支援するつどい」は、四〇〇人近い客様でした。一〇〇人を超えるボランティアの方が集い、各会場が例年以上の盛り上りを見せていました。

岸川悦子さんの「命の講話」を再き続けて『骨髄バンクの講演は、御自身の敗血体験や闘病の経験を通して語られた心の底まで訴えかけるお話しで、会場の中は深い感動に満ちていました。

シレーネ・カンタンテのコンサートは「やさしなやベラ祭」は、いつもの美しいコーラスに加えて、メンバーの歌曲のソロやデュエットが聴きどころとなりました。

食堂は昨年は新たに、「おしゃれ、天然水」を扱えてきていただき、各種のお客がさらにおいしくなりました。特にコーヒーは昨年を大きく上まわる売り上げでした。

バザー会場では、不景気も重なってあまりたくさんの品物は用意できませんでしたが、高速道路の開通の影響で、昨年の高速千葉、福島、千葉、埼玉で四回も演奏するというハードなスケジュールでした。皆さんが福島に到着したのは、前日一二時一目の夜十三十分、翌日は朝八時に六ホテルを出て福島県立医科大学付属病院内にある第四川興運学校医大分校を訪問、その後、オープンになったバンダ・ハウスでの懇談、引き続き音楽室でのリハーサル、そして演奏会、終了後の高速道路で次の演奏地千葉、と、目の回るような日程でしたが、サンクト・フローリアンの皆さんがどんな場面にも全力を出してくださり、素晴らしい一日となりました。

医大分校訪問では、地図や外国の本、さらにはハンガリーの香辛料まで持ってきていただき、子供達にも分かりやすく曲目の解説や外国の事情などをお話ししていただきました。

歓迎と感謝の念を込めた合唱「もみじ」の披露があり、思わず胸が熱くなる思いでした。つづいてオープンの同じくバンダ・ハウスを訪問ボランティアとして運営にあたっている骨髄バンクを育てる会の皆さんと心尽くしの昼食をいただきながら、これからの運営などについて懇談しました。サンクト・フローリアンの皆さんからは絵のプレゼントがありました。

その後、急いでコンサート会場に向かい、入念なリハーサル、スタッフの設営では妥協のない打ちわせが行われましたが、福島ジュニアオーケストラの皆さんの助けを受けて準備完了。ピアノ三重奏のあゆみる響きが広ったときは、ほっとするとともに、ここに至るまでなんたらの苦労があったかと、胸がいっぱいになりました。

十二月十二日（土）いよいよ明星大学人文学部3-101教室にて、スマイルの会主催の「骨髄バンクとボランティアを考える集い」が開催されました。第一部は、骨髄提供者の他田あゆみ、横浜市在住・と移植を受けた元患者の吉田康恵さん（共にいわき市在住）の対談。第二部はエッセイストの大石邦子さんの講演を行いました。会場は一百名を越える学生・一般の方々で埋め尽くされ、若い世代に直接訴えかける絶好の機会となりました。

明星大学人文学部社会学科四年、橋谷田康弘さんが、「骨髄移植に関してから、医師と患者の権利、そしてQOL（生活の質）について」とのことでしたが、ご協力をお願いしました。

論文の内容は、まず骨髄移植に関してから、医師と患者と家族の関係や患者の権利、そしてQOLの問題などを、ご自分の経験を通じて、ご協力をお願いしました。

私は生活の最後に貴重な経験を良い思い出ができ、充実した時間を過ごしてこれた。

私の人生が様々な場面で支援されていることは間違いありません。

ご協力をお願いしました。

私は、一人が患者になってから考えることは、「元気なうちに自分に一番合っている生活のあり方を考えるべきではないでしょうか